

衆生のきずなを求めて!

NPO 現代座

2013 年 11 月 1 日 発行
(通巻 459 号)

現代座レポート No. 56

- ・「約束の水」準備を開始 (1)
- ・2014 年 2 月上演予定「約束の水」(2 幕 4 場) (2)
- ・地域おこしプロジェクト「川崎平右衛門」の取り組み (3)
- ・会館をつどいの場に (4) ~ (5)
- ・NPO 現代座を支える人々 第 13 回 東志野香さん (6)
- ・わたしの近況 木村快 (7)
- ・お知らせ・新規・継続会員・寄付者のお名前 (8)

NPO 現代座ホームページ <http://www.gendaiza.org/>

特定非営利活動法人 NPO 現代座 発行責任者：木村快

〒184-0003 東京都小金井市緑町 5 丁目 13 番 24 号 TEL 042-381-5165 (代) FAX 042-381-6987



出川三男「約束の水」イメージプランより

NPO 現代座二〇一四年二月上演作品
木村快・作 岡田京子・音楽 出川三男・美術
「約束の水」 準備を開始

いつもそばに水があった
あのころの暮らし
人はこころのなかで
水を探しつつづけている

水・心のきずな

豊かさや便利さを追求し続けてきた二十世紀を通り過ぎてみると、夢と希望の世紀であったはずの二十一世紀は一転して、不毛な戦争と環境破壊の世紀になってしまいました。グローバル化したネット社会では世界中の情報が飛び交い、すべてが判っているようでありながら、実はどうすることもできない時代です。環境の危機が叫ばれながらも、環境が改善されるきざしはありません。

日本は世界でもまれな自然豊かな国ですが、日本の自然は人間が深くかわりながら育ててきた自然ですから、人間が自然とのかかわりを失いつつある現代は山も川も荒廃がすすみ、四季の恵みも自然さを失いつつあります。

自然のサイクルを生み出しているのは水です。水が支える自然の一部として、人間の営みは繰り返されてきました。昔から民話伝説の世界では水にかかわる話が多くあります。けれど、現代人の心に訴える水の話はなかなか見えてきません。水も危機の時代を迎えています。

『約束の水』は自然環境とかわる人々を訪ね歩きながら生まれた作品です。小さな泉を探し求める心が、時間と空間を超えて、人間のきずなを取り戻す夢を見たいと思います。

木村快

上演日程

2014年
2月

13日(木)	14日(金)	15日(土)	16日(日)	17日(月)
-	14:00	14:00	14:00	14:00
19:00	19:00	-	-	-

一般 3000 円
小中高 1000 円
現代座ホール

各回 80 名の予約制です。TEL:042-381-5165 FAX:042-381-6987 メール:michiko@gendaiza.org



山中三郎
(今村純二)



山中啓一
(寺崎昌広)



妻・よし子
(木下美智子)



林業作業士・竹田
(黒澤義之)



三郎の孫・靖夫
(八木浩司)



市役所職員。ミキ
(東 志野香)



日系人・ミツコ
(矢川千尋)

約束の水 (2幕4場)

二〇一四年二月上演予定

◆廃墟の村で

丁市の観光課にミツコと名乗る日系ブラジル人の若い女性が「谷山村へ行きたい」と訪ねてくる。谷山村とは昔の村名で、今は丁市の奥にある山間の僻地で無人地区となっている。

戦前に谷山村からブラジルに移住したミツコの祖母が、故郷の村の「約束の水」という湧き水を恋しながら息をひきとったという。ミツコは祖母が恋しがった「約束の水」という湧き水のある場所を一目見たいと言っているのである。そこで、谷山生まれだという市の広報課職員ミキと、同じ谷山生まれの靖夫が案内することになる。

谷山地区へ入ってみると、まちで暮らしているはずの靖夫の祖父、山中三郎が作業着姿で空を眺めていた。

三人は三郎に、昔「約束の水」と呼ばれた泉のありかを聞いてみる。三郎は必死に昔の記憶を呼び戻そうとするが、どうしても思い出せない。だが、見捨てられたこの村を終生恋しがったというミツコの祖母は、自分と同世代らしい。三郎はなんとかして、その泉を探してやりたいと思った。

◆年老いた父をどうするか

そこへ靖夫の父啓一と母よし子、それに林業作業士の竹田がただごとならぬ様子でやってくる。三郎が山に行くと言ったまま、二、三日戻ってこないで、近所の人たちが心配しているという。啓一は建設会社のリストラでいつ失業するかかわからない不安を抱えており、その上、年老いた父親を無人地区に放置する親不孝息子と噂されて、な

んとしても親父を連れ帰ると息巻いている。

週に一度は三郎の身の回りの世話をしている妻のよし子は、「お父さんがなぜ山で暮らしたがつているのか、ちゃんと聞くべきだ」と言い、孫の靖夫は「じいちゃんの好きなようにさせたい」と無責任。

山で林業に従事する竹田には三郎が山で暮らしながら、チヨが亡くなると急に無口になり、周囲は三郎がぼけてきたのではないかと心配していた。三郎は自分の育った村の記憶が遠のいていく不安と戦いながら、自分を取り戻す努力をしていた。

◆自然の中で自分を取り戻したい

三郎は、長い間寝たきりの妻チヨを介護していたが、チヨが亡くなると急に無口になり、周囲は三郎がぼけてきたのではないかと心配していた。三郎は自分の育った村の記憶が遠のいていく不安と戦いながら、自分を取り戻す努力をしていた。

三郎はかつて住んだ山の家を手直しし、小さな畑を耕し、地区のあちこちに集落の特徴やいわれを書いた案内板を立て、昔の記憶を呼び戻そうと努力していた。しかし、啓一は三郎を強引に連れ戻そうとする。

◆よみがえるきずな

三郎は啓一の説得を無視し、ミツコを連れて泉探しに出かけようとする。それを押しとどめようとする啓一と争ううちに、三郎ははずみでひっくり返ってしまう。「もう駄目だ……」。やっと起き直った三郎の目に涙がにじんでいた。

そのとき、ミツコが言った。「おじいさんのような方と出会っただけで、おばあちゃんとは違って喜んでると思います」と礼を述べ、「これはおばあちゃんの形見です」と、祖母が大事にしていた青い小石を差し出した。

その青い小石を受け取った瞬間、三郎はその小

石が小学校の近くにあった「約束の水」の水受け場のものであることを思い出す。ブラジルへ行く同級生の女の子のために、その泉の前でお別れの会をした情景がよみがえってくる。

在りし日の村の暮らしを語る三郎の顔は輝き、山に生きる男の姿がよみがえっていた。ついに啓一も「父さん、その泉を探そう」と言います。一同は三郎の記憶を辿って泉を探し始める。

【演出スタッフ】

作・演出 木村 快
演出助手 西河 大 木下敬志
照明 渋谷博史 高橋康孝
音楽 木村康恵
美術 岡田京子
美術 出川三男
宣伝美術 東志野香

* 作品の背景などを検討するテーブル稽古が十月十日から始まっています。



地域おこしプロジェクト

「川崎平右衛門」の取り組み

人間復興のドラマを

二〇一〇年からNPO「小金井シニアSOHO」とNPO現代座が協同で、武蔵野台地を開発した川崎平右衛門（へいえもん）という人物の勉強会を重ねています。

現在の東京多摩地区から埼玉県にかけての武蔵野台地は、江戸時代中期までは不毛の大地と言われていました。これを宝永大地震で打撃を受けた幕府が、食糧確保のため開墾事業を起こします。しかし思うようには進まず、度重なる大凶作でついにこれまでかと思われたとき、農民主体の協同の取り組みで成功に導いた農民リーダーが現れます。多摩郡府中押立村の名主、平右衛門です。

これまであまり知られることのなかった新田開発の歴史を、現代の視点で見直してみようというのが地域おこしプロジェクトの目的でした。

勉強会が始まって半年後、二〇一一年三月、突然東日本大地震が起こり、宝永大地震と同じような事態が次々と展開されはじめました。そこで武蔵野台地開発の歴史を、人間復興という現代の視点で取り組んでみようということになり、市民向けの合唱構成劇の創作を進めています。現在は脚本の段階に入っています。以下は現段階のストーリーです。

「武蔵野台地の夜明け」（仮題）

今から三百年前の宝永三年（一七〇七年）十月、関



右側の小山が宝永三年の大噴火でできた噴火口。

東から西日本にかけて、二〇一一年の東日本大震災とほぼ同クラスの大地震と津波が発生し、さらに富士山の大噴火を併発し、房総、江戸、駿河、和歌山、四国、九州に大被害をもたらします。津波による人的被害は二万人と言われ、関東から和歌山にかけては、降り積もった火山灰によって作物が収穫できず、大飢饉が連続して発生しています。

幕府は全国の大名から復興資金を集めますが、元禄時代のバブルで緩んでしまった幕閣や役人たちは、復興資金を財政赤字の穴埋めや賄賂に使うなどして、肝心の復興政策はほとんど進みませんでした。

大震災から十年後の享保元年（一七一七年）、徳川吉宗が第八代将軍に就任します。吉宗はこの十年間、紀州和歌山藩主として震災被害からの回復に全力を注いだ経験から、幕府の一大改革に取り組みます。「享保の改革」の始まりです。このとき吉宗を補佐したのが大岡越前守忠相（おおおかえちぜんのかみ・ただすけ）でした。

吉宗と大岡忠相は世襲の役人に代えて、現場で復興事業に取り組んでいる農民・町人の中から優れた人材を抜擢し、河川の治水、新田開発、サツマイモの普及、貧民救済のための小石川養生所の建設を進めています。

最大の課題は新田開発でした。当時の江戸は世界最大の百万人都市になっており、食料確保のため、不毛の大地と言われた関東ローム層の武蔵野台地を食糧基地に変える大事業を展開します。しかし新田開発は思うようには進まず、十六年間も試行

錯誤を繰り返します。一七三八年（元文三年）、武蔵野新田は大飢饉に襲われ、農民の離散が始まります。このとき八十八か村を建設する責任者として抜擢されたのが多摩郡府中押立村の名主、平右衛門でした。

平右衛門は幕府の役人と違って、自分たちの村は自分たちで作るといふ方針で、世帯主だけでなく、村中の女、子供、老人も含めた全体が助け合う村づくりを進めました。村の施設は自分たちでつくり、飢饉のための食料の備蓄、荒地地でも育つ換金作物の普及を協同で進め、現在の協同組合のような仕組みをつくっています。また、村人総出で玉川上水の岸辺に桜を植え、小金井桜を有名にしたのも平右衛門の指導によるものでした。桜がつぼみをつけはじめたところで、平右衛門は幕府の要請で新しい任地に去って行きます。

上演形式をめぐって

普段は演劇とは無縁の人々との三年越しの創作活動です。江戸時代の話や演劇にするというので、地域の皆さんは、最初、時代劇風の上演をイメージしていたようですが、それには膨大な資金がかかるということがわかり、それでは自分たちでも可能なやり方を考えてみようということになりました。

できれば市民も参加できる形をつくりたい。講談のスタイルはどうか、語り物ではどうだろうと、いろいろな上演スタイルを考えてみました。最終的には合唱構成劇として上演することになりました。では合唱構成劇とはいかなるものか、ここでまたひとしきり議論になります。

こうして上演のあり方を地域の生活視点で語り合うことそのものが、地域おこしの文化活動だということをお納めしながらの取り組みです。

会館をつどいの場に

「緑町ふれあいサロン」が始まりました

十月一七日(木)午後、現代座の一階で「緑町ふれあいサロン」が開かれました。すぐ近所にお住まいの方々が集まってくださいました。

実は現代座は以前から、出来るだけ地域の方々へ会館を利用していただきたいと思っていました。でも「演劇をやる場所」というイメージが強く、地域の方が気楽に来られるところにはなっていませんでした。

五月公演の「出会いの街」に出演した長谷川葉月さんが、「現代座で、子育て中のお母さんやお年寄りが集まって、ゆったりした気分で朗読を聞いてリフレッシユする活動をやりたい」と提案してくれました。長谷川さんは色々な所で朗読をしているのです。そんなことができればいいな！是非実現させたい！と思いましたが、どうしたらいいか……。

今年から地元の緑町第二町会の役員会が現代座を会場に使うてくださっているのを、会長さんに相談しました。そして町会役員で民生委員の古明地(こめじ)節子さんが「やりましょう！」と断ってくれたのです。「うちの町内会には集まれる公共の場所が無いの。現代座が使えるならこんなうれしいことはないわ」

偶然今年から福祉協議会で、地域の居場所づくりのサロンへの助成事業を始めることも分かりました。会場使用料や経費を補助してくれるのです。

そこで早速「緑町ふれあいサロン」という会を作り登録しました。

月に一度ごく近くの方が誰でも気楽に集まれる集

にしよう。そこで朗読も楽しんでもらおう。

すぐにチラシをつくり、町会の回覧板で回したり、古明地さんが民生委員の仕事で訪ねたお年寄りに渡したり。

でも果たして人が来てくれるかしら……と心配しながら迎えた第一回でした。

町会の女性の役員の方達がまず来てくれました。そして次々と古明地さんを訪ねてご年配のご婦人達が来てくださって、十四人が集まったのです。

はじめて顔を合わせたのに、話してみたらすぐお向かいに住んでいたたり、昔お隣だったたり。自己紹介だけでとつても盛り上がり、あつと言つ間の楽しい二時間でした。

次回は長谷川葉月さんが芥川龍之介作、「杜子春」を朗読する予定です。

地域の方達が気楽に集まって、心を通わせる場にしていく第一歩になりそうです。(木下美智子)



月一度の「緑町ふれあいサロン」はじまる。

S P レコード雑談会

毎月、最終日曜

日に、木村快を中心に2F和室でS P レコード雑談会を開いています。

S P とはスタンダード・ブレイの頭文字をとつたもので、昭和三五年頃から出現したL P (長時間)レコードに対して、古くからの毎分七八回転の標準版を意味しています。

S P 版は昭和二年から三五年までに発売されたもので、ちょうど戦前・戦中・戦後の世相を反映しており、雑談会は思い出を語ることによって、昭和という時代を考える場になっています。

木村は創作に必要な時代考証のため、S P レコードと昭和期の劇映画の録画を蒐集しています。S P の音源はクラシックをはじめ、軍歌、童謡、映画主題歌などが五千曲以上あり、昭和世代の参加者にとって、自分の生きた時代を振り返り、再発見する機会にもなっています。

最近では戦時中にデビューした田端義夫の人生、唱歌童謡の戦中戦後の変化などを話し合いました。



教育文庫の開設

高橋幸恵

私は通信大学で教育科目を学ぶ学生の支援として、毎週日曜日、二階の会議室をお借りして、早稲田ラジオ・スクールの講座を開いています。この度、現代座と相談の上、二階会議室に教育関係の書籍を置かせていただくことになりました。

まだまだ不十分な点ばかりですが、以前から「学びのある人の集う場」を作りたいと思っていました。街に図書館があってもそこに人のつながりがなければ、単なる本を借りる場になってしまうでしょう。人が集うこと、つながることはもちろんそれだけで十分意味のあることだとは思いますが、それだけでは勿体ない、そこに学び、知的な前進があれば尚、良いのに——、そこで、人がつながっていくことのできる図書館的なものができないかと思ったのです。一般の図書館の閲覧室では、静かにしていなければなりませんよね。もちろんそれも大切なことなのですが、本の感想を交流したり、すぐその場で本を紹介しあったり、そのようなことが柔軟にできる



——そんなおしゃべりののできる図書館になつていたらなあと思つています。かつて、ドイツの大学では、選ばれた学生が参加するゼミナール専用の部屋があつたそうです。そこには、ゼミで扱うテーマに関わる本が置かれ、議論の途中で曖

昧なところがあつたら、すぐに書棚から本を取りだし、教員と学生が一緒に、確認し、学びながら、学習を進めていったそうです。

私もゼミナール形式で学生と一緒に学んでいます。そのときに、すぐ本を手にすることができると、学び方が大きく変わってきたと感じています。学生の発言に合わせて議論は展開していきます。すぐその場で文献を示すことで、学生の学ぶ意欲も高まっていくように思います。学びの場で取り上げた本を借りたいと申し出る学生も増えてきました。

まだ本の整理ができていないので、すぐに実施することは難しいのですが、この図書館をNPO現代座の会員の皆さま、地域の皆さまに開放していくことができればと思つています。そして、貸し出しもできればと思つています。

人と関わっていくときに、何か媒体となるものがないと、なかなか出会いを活発にしていくことが難しいのではないかと思います。その媒体にこの本がなつていったらいいなあと思つています。皆さま、どうぞよろしくお願い致します。

会館の電気配線、電気設備の整備

◆会館エアコンの総入れ替え

3F小劇場、2Fサロン、2F和室、1Fサロン、地下ホール、全館のエアコンを新しく設置しました。

◆全館電気配線のリニューアル

最近では会議や研修ばかりでなく、合宿研修、子どもたちの食事会などで利用されることが多く、湯沸かし、レンジ、炊飯器などが使用されます。そこで、全面的に会館の電気関係をリニューアルしました。

八月～十月 活動日記

八月二十五日 会館玄関の改修。

二〇日 『共生の大地アリアンサ』出版

アリアンサ・ユバより熊本夫妻来訪

二三～二四 小金井平和盆踊り、踊り指導

二五日 全館インターネット設備の施設。

九月 二日 川崎平右衛門プロジェクト・例会

九日 劇場講座・例会

二五日 木村快・日本力行会出張講座

二九日 SPレコード雑談会・例会

十月 二日 木村快・日本力行会出張講座

三日 電気配線工事はじまる(十月一杯)

九日 川崎平右衛門プロジェクト・例会

九日 会館前に自販機が設置される。

一〇日 「約束の水」稽古はじまる。

一六日 劇場講座・例会

一六日 つきみの園より椅子二五脚頂く。

一七日 地元・緑町ふれあいサロン開催

二三日 木村快・日本力行会出張講座

二七日 SPレコード雑談会・例会

現代座ホール

九月 九日～二八日 クロジ(劇団)稽古

一〇月一四日～一五日 希望舞台(劇団)稽古

一〇月一六日 シアター青芸(劇団)稽古

一〇月二二日～二八日 隣光群(劇団)稽古

定期活用 2Fサロン

毎日曜日 早稲田ラジオスクール(教育)

毎月曜日 子どもクラブ・バンビノ

毎水曜日 熟年パソコン・サークル

隔木曜日 i Pad 熟年講座

NPO現代座を支える人々

第十三回 東志野香さん

記 武本英之



東志野香 (あずま・しのか)

現代座のお芝居を観た人なら、一度は目にすることがある、お馴染みの役者さんだ。「ボエムがあつて、自然の演技ができる役者だねえ」と、木村快さんの評価も高い。現在は社会性にテーマを求め、登場人物は日常の生活を当たり前に行う市井の人々が多い。そういう群像を演じるには歌舞伎で見得を切るような芝居がかった演技はむしろ邪魔になる。ごく自然な生活者としての演技が求められる。東さんはそれができる貴重な役者さんというわけである。

東さんと木村作品との出会いは「朝の風に吹かれて」病院の看護師さんの生感を赤裸々に描き出したこの作品を、東さんは台本を読んで衝撃を受けた。そして「チヨイ役で初めて(木村作品に)出演した」という。「芝居の役には、作者が話を運ぶ都合上登場する役がよくあります。が、快さんの作品にはそれが全くありません。どんなチヨイ役でも、どの役をやっても、全部の役が芝居の流れの中で矛盾無く生き生きとしてるんです」と東さん。

この「朝の風に吹かれて」の上演は、木村快さんとは現代座の前身である統一劇場時代からの盟友・愛田巡也さんの企画によるものだ。まだ東さんが現代座に本格的に関わる以前、愛田さんが若い役者を集めて木村作品を次々に上演していた時分、東さんも参加した。その時、東さんが出演した木村作品はざっと――「朝

の風」「絆をつくる町」「希望」「遙かなる島」「ユウレイよ自分の足で立て」「雨あがり」などなど。現代座と関わるようになってからは「約束の水」「蒼い空・友の呼ぶ声」「ここは幸せゼロ番地」と立て続けに出演。北海道、関東、信州、中部、関西と地方公演にも数多く参加してきた。「約束の水」の京都公演は、東さんのご実家の父上が上演のための実行委員会の事務局長として汗をかいてくださった。

「約束の水」は来年二月、装い新たな上演が決まり、稽古が十一月二十一日から現代座でスタートする。東さんも再び市役所の広報係・中川ミキ役で登場する。3・11大震災以降の時代状況も織り込まれてバージョンアップするらしい今度の「約束の水」で、東さんがどんな芝居をみせてくれるか、ファンの人としても楽しみだ。というのも、小生の作品「ここは幸せゼロ番地」にも東さんは出演。タクシー会社の女性経営者として弟の社長と古株のドライバー達の狭間で、もがき悩んだ末、女性のネットワークを武器に立ち直っていくという、現代の女性チャレンジジャー・青島蝶子役を見事に演じ切っていたのだ。感謝と期待を込めて次回作をお待ち申し上げておりますよ。

そんな東さんをもっと紹介しよう。なんと、小さい頃は「この桜吹雪、散らせるもんなら散らせてみやがれ!」の決めゼリフを吐く遠山の金さんでお馴染みの中村梅之助の大ファンだったそうだ。京都出身の東さんは、梅之助率いる前進座が京都四條・南座で行う正月公演を、お婆ちゃんと一緒に観に行っていたという。地元の美大を卒業した東さんは一旦就職するも、二十四歳で脱サラ。梅之助が座長をつとめる東京・吉祥寺にある前進座の養成所に入門したのである。十一人の研修生のうち九人が女性。研修終了後、前進座に入りたかったが女性の採用枠がなく、採用されたのは男性一人だけだったそうだから、厳しいねえ、世の中は。それでも「三味線から狂言の小舞まで、こころし

かできないことがたくさん学べました」と、今では役者としての財産になっている。

時代劇の前進座から一転。俳優座系の新人会に入り、「奇跡の人」のヘレン・ケラー役など、学校公演を主に地方巡演を重ねた。小柄だったせいもか子役が多く、サリバン先生はやらせてもらえなかったとか。「東北で行った学校が大震災の影響を受けたようので胸が痛みます」と懐かしい思い出も複雑のよう。

東さんは元々、美大出の「画家」である。「友の呼ぶ声」のチヨシ絵は実は東さんの筆になる。「お気に入り」の画家を一人だけ挙げて下さい」という小生の強引な注文に、しばらく考えた末、東さんはイタリア・ルネッサンス初期の「ポッティチエリ」を挙げた。「聖母像が好きです。彼の描く宗教画にはストーリー性があるんですね」と、演劇的な見方もして面白。

東さんは「女優」という言葉よりも「役者」という言葉の方が胃の腑に落ちるという。女優というきらびやかなイメージよりも庶民的な役者こそモットーしたい、という覚悟の表れか。なにせ、遠山の金さんですからねえ、東さんのヒーローは。こんな感覚が庶民の喜怒哀楽を表現する現代座の芝居とマッチしているのかも知れない。「現代座の好きな所は、直ぐそばに観客がいることです。地域の人が歩いて来れる所でお芝居をやっている。公民館だったり、学校の体育館だったり」と東さん。地域に開かれた劇場を標榜する現代座でこれからも東さんの活躍を期待してまします。

最後にもう一つ。現代座ではこの程、ツイッターを始めました。その管理人を東さんがやっておられますので、皆さまもお芝居の感想なり、はたまた現代座への注文なり、つぶやいていただけますと幸いなり。やり方がわからない方は、現代座のホームページからも見られますのでぜひごらんください。(了)

*このシリーズを担当している筆者の武本英之さんは専門誌「東京交通新聞」編集局長、NPO現代座正会員でもあります。

わたしの近況

「共生の大地・アリアンサ」その後

木村快

『共生の大地アリアンサ』の出版にこぎ着けてほっ
としていきます。

みなさんのご協力のおかげで、少しずつ広がりが出てきています。ありがとうございます。

ブラジルのみなさんには大変喜んでいただけました。それはおもしろいからではなく、これまで謎とされていた日本政府の移住政策の実態について、おまかながら初めて記述した文献であったためです。これで、二世以降の日系人にブラジル移住の実態を伝えられるという感想が寄せられています。

サンパウロの邦字紙『ニツケイ（日系）新聞』では九月八日号に書評が掲載されました。その後の伝聞によれば、現在、日本語を読める一世はほとんどなくなっている、ぜひブラジル語（ポルトガル語）訳で出版したく、そのための協力運動を始めたというのとです。ただし、そのためにはかなりの資金が必要なので、NPO現代座でも協力したいと考えています。

国内でもブラジル関係の方々がいる奔走してくださいました。日本ブラジル協会からは月刊誌『ブラジル特報』へ「多文化共生と日本文化の課題」のテーマでの原稿依頼があり、寄稿いたしました。ラテン・アメリカ協会の機関紙でも紹介していただきました。

出版社から宅配便で書籍が届いたとき、うれしさのあまり、直接二十五キロの包みを受け取ったところ、持病のぎっくり腰が再発、一ヶ月間じっと座っていました。このままでは足腰が弱くなるので、歩く努力をしなければなりません。三半規管に障害のあるメニエ

ル病も持っている、自由に歩き回ることは出来ませんが、会館へ出勤するときは一生懸命歩いています。

会員の皆さんからも次々激励の感想を寄せていただいています。それによると、いろいろ問題もあるようです。始めと終わりは大変読みやすいけれど、国策についての歴史記述の部分がやはり難解のようです。

今回の出版の目的は少しでも国策移住の実態を書き残しておきたかったからでした。原稿の量から言っても一般の書籍の二倍はあり、価格も高く、気軽に読んで貰うレベルを超えています。やむなく読みやすさより正確な記述に努力せざるを得ませんでした。

前半三分の一と、後半三分の一のユバ農場の紹介の部分だけでも読んでもらえればありがたいです。

今後、一般の方にも理解していただけるよう、わかりにくかった部分をブックレット・スタイルのエピソード集の形で発行したいと考えています。

会員の細田さんが早速感想を寄せて下さったので紹介します。

「共生の大地アリアンサ」を読んで

細田伸昭（現代座会員）

二十数年前、私は木村快さんの「風は故郷へ」という劇を、立川で実行委員会をつくって公演したことがある。その快さんが日系移民を扱った劇「もくれんのうた」を発表したのが一九九四年。この劇は、ブラジルでの公演も行った。その劇づくりや公演の過程で「国策としての移民史」から意図的に消された移民の歴史があることを知り、聞き取りや資料を集め、書き上げたのが「共生の大地 アリアンサ」だ。本になるまで

には十九年の歳月がかかったと言う。

実は、私はアリアンサの中心にある「ユバ農場」のことを「朝日ジャーナル」の一九八〇年代後半に発行された号で読み、知っていた。日系移民の手によって作られた農業と芸術が一体化した「ユバ農場」。ジャーナルの記事は、心のどこかに少なからぬ衝撃とともに残っていたのだ。

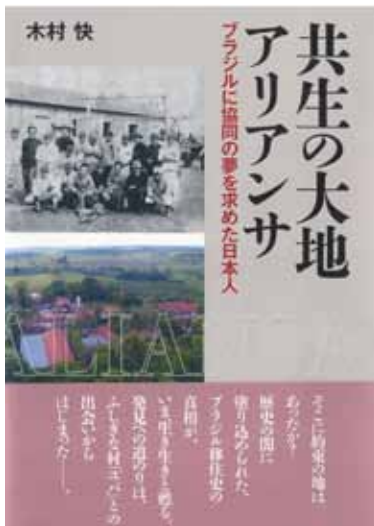
それから二〇年近くが経ち、私は岡田京子さん主催の寺子屋を手伝うことになった。そのとき講師として迎えた木村快さんが、実は「ユバ農場」を何度も訪れており、移民の歴史を調べていることを知った。私は、何か「縁」のようなものを感じたのだ。そして今回の「共生の大地 アリアンサ」の出版。「日本の移民の歴史から消されていたアリアンサ」、その誕生に至る経過やその後の歴史が、丹念に調べ上げられている。私の心のどこかに残っていた「ユバ農場」という（こり）がブラジルの大地の中で〈解放〉されたような、そんな気がしたのだ。

移民と言え、日本の人口増加のための口減らしくらいにしか思っていなかった私ですが、快さんの本を読み、そこには理想に燃え、新しい協同の村づくりを目指した多くの人々がいたことを知り、なぜか「ホッと」した気がします。（へんな言い方ですけど……）

移民政策の青写真を、移民する人々のために作った永田稠（しげし）や輪湖俊午郎、それをサポートしていく日本力行会の青年たち、現地で大胆な開墾を行い、労働と芸術の一体化を、楽しく強引に押し進めた弓場勇……、歴史を作っていくのは、こうした人々なのだ。と改めて思いました。

ブログ「三線な日々を吾天為」より
<http://isbotoke.blog68.fc2.com/>

会員の皆さまへのお知らせ



共生の大地・アリアンサ

ブラジルに協同の夢を求めた日本人

木村快著

NPO現代座の国際支援事業として、歴史から抹消されたブラジル・アリアンサ移住地の歴史を掘り起こした記録です。アリアンサにあるユバ農場は農業をやりながらバレエを踊り日本語の芝居もやる不思議な農場です。なぜこんな不思議な農場があるのかをさぐっていくうちに、国の移住政策に逆らって、自分たちの自治による理想の移住地をつくろうと闘った大正時代の男達のドラマが見えてきました。是非読んでみてください。

定価は3675円（税込み）で、書店でもネット通販でも購入できます。
現代座では特別価格3000円（税込み）で販売しています。
3000円と送料300円を振り込んでいただければ郵送します。

振込先：郵便振替口座 00110-7-703151 NPO 現代座

お問合せ：現代座 042-381-5165 木下 michiko@gendaiza.org

NPO 現代座の公演予定

遠い空の下の故郷

～ハンセン病療養所に生きて～

11月26日（火） 午後1時～

大本山増上寺 三縁ホール

「人権の世紀」人権を考える研修会：浄土宗東京教区

12月7日（土） 時間未定

狛江市カレーショップ「メイ」

お問合せは市原広子さん 090-1803-8319

NPO 現代座会員の取り組み

劇団「花時計」公演

昭和バラエティシリーズ第2弾

「シネマチック・カフェで逢いましょう」

作・演出／平内秀信

11月30日（土） 14:00/18:30

12月1日（日） 14:00

一般2500円 中高生1000円（ドリンク付き）

現代座会館3F 小ホール

お申込み・お問い合わせ：中村 090-1261-0365

平内 090-2073-7686

NPO 現代座の会員へのお誘い

- 年間4回発行の活動レポートをお送りします。
- 現代座会館の公演、講座など催し物の参加料を割引します。
- 会員による企画行事をお知らせします。
- お申し出があれば、上演舞台の録画DVDをお送りします。

NPO 現代座は会員によって支えられています

★年会費（現代座レポート購読料を含む）

一般会員 3,000円

協賛会員10,000円（1口以上）

郵便振替口座番号 00110-7-703151 NPO 現代座